

須恵器窯から六古窯への展開について

メモ) 鉄本 2021.06.29

土師器、須恵器から六古窯への技術的系譜とそれぞれの特徴をまとめました。

1. 焼成法による「やきもの」の大分類

| 種類 | 焼成温度 | 材料 | 窯 | 焼成法 | 代表例 |
|------|-------|----|---|-------|-------------------------|
| 土器 | 800℃ | 粘土 | 無 | 酸化焰焼成 | 縄文・弥生、土師器、瓦器 |
| 陶質土器 | 1100℃ | 〃 | 有 | 還元焰焼成 | 須恵器 |
| 陶器 | 1200℃ | 〃 | 〃 | 〃 | 瀬戸、美濃、丹波、知多、備前、信楽、常滑、越前 |
| 磁器 | 1250℃ | 陶石 | 〃 | 〃 | 有田、柿右衛門、唐津、清水 |

【参考】 *炎は、炎心、内炎、外炎の3層に分画される。外炎は外部の空気に接触しており酸化性物質を含んでいるために酸化反応が起こりやすい(=酸化焰)。内炎では酸素の供給が不十分なため、ここに酸化物を投入すると、酸化物から酸素を奪う還元反応が進行する(=還元焰)



2. 製造技術の系譜からみた土器と陶器

| 大分類 | 中分類 | 製法の系譜 | 代表的窯・やきものの例 |
|-----|-----------|-----------------------------------|---------------------------|
| 土器 | 土師器 | 古代からの製造技術による赤褐色の焼物 | 列島各地に見られる。碗、皿、鍋、釜など |
| | 瓦質土器 | 土師器の黒色土器の系譜 表面がいぶされて灰黒色を呈す。 | 西日本中心に見られる。碗、皿、火鉢、鍋、すり鉢など |
| 陶器 | 須恵器系陶器 | 古代須恵器の技術を踏襲した焼物 大半のものは中世前期に終焉 | 備前(中世後期以降、灰色から褐色に変わる) |
| | 瓷器(しき)系陶器 | 灰釉陶器の技術の影響を受けた焼物 「灰釉」と「緑釉」がある。 | 施釉:瀬戸 無釉:常滑、越前、信楽、丹波 |

3. 六古窯(*)の系統と特徴

| 窯名 | 古墳時代 | 奈良時代 | 平安時代 | 鎌倉時代 | 室町時代 |
|-----------------|----------------------------|------|------------|------------------|------|
| 陶邑窯跡群 5~9世紀 | ←—————→ 瀬戸内海沿岸の窯(東播窯など) | | | | |
| *備前焼 平安末期~ | | | | 還元焰 | 酸化焰 |
| 猿投窯跡群 5~12世紀 | ←—————→ | | | 12世紀以降は瀬戸・常滑等に分派 | |
| *瀬戸焼 鎌倉初期~ | | | 灰釉焼成 | 瀬戸焼開窯 | |
| *常滑焼 12世紀中葉~ | | | 猿投支窯 | | |
| *越前焼 12世紀後期~ | | | (常滑から技術拡散) | | |
| *丹波焼 12世紀後期~ | | | (常滑から技術拡散) | | |
| *信楽焼 13世紀中~ | | | (常滑から技術拡散) | | |

【六古窯の概要と特徴】

＜瀬戸窯と他の五古窯の違い＞

* 瀬戸窯＝中国陶磁器の高度な技術と意匠を導入し、寺院・貴族・武士層のための高級調度品として
四耳壺・瓶子・水注などを生産。特に、鎌倉幕府と密接な関係性を持った。

* 他の五古窯＝主に貯蔵容器としての壺・甕・すり鉢などを生産。

| 窯名・主要地域 | 特徴 | 釉薬 | 色/粘土 |
|--|--|-----------------------|---------------------------------|
| 備前 現代まで唯一の無釉焼成 岡山県備前市伊部一帯 | 六古窯の中で唯一須恵器系陶器。12世紀頃に始まる。須恵器を起源とするが、須恵器系陶器窯が衰退していく中であって、酸化焰焼成による焼締め陶に転じた。常滑焼に似た褐色の甕やすり鉢を生産するようになる。吸水性はほとんど無い。桃山以前のもものは古備前、江戸時代のもものは伊部焼という。 | 無釉 | 赤褐色 田土 |
| 瀬戸 中世で唯一の施釉焼成 愛知県瀬戸市及びその周辺 | 猿投窯を母体とする。平安中期頃から灰釉陶器を焼成。鎌倉時代に加藤景正(藤四郎)が宋から 施釉による陶法 を持ち帰り瀬戸焼を開窯。室町以前のもものは古瀬戸と呼ばれ、主に唐物を模した茶入が見られ、灰釉のほか飴色の釉薬、天目釉を多用。桃山から江戸初期にかけて、瀬戸黒、志野、織部、黄瀬戸などの茶器が焼かれた。 | 施釉 灰釉 鉄釉 | 黄色 飴色 茶褐色 黒色 |
| 常滑 中世古窯の最古・最大規模 愛知県知多半島 | 平安時代に 猿投窯の支窯 として開窯。六古窯のうち最古の窯。12世紀に在地の需要に合わせ、大型の窖窯で自然釉のかかった粗雑な甕、壺、すり鉢などを生産。知多半島一帯に二千基を越す窯跡がある。最大の消費地は奥州平泉で、経文埋蔵のための「三筋文壺」を生産。明治以降は急須などの朱泥製品が知られ、現代では土管、タイル、植木鉢などが見られる。 | 無釉 自然釉 | 赤褐色 (朱泥) 鉄分の多い土 |
| 越前 窯の大型化による共同操業 福井県丹生郡一帯・武生市 | 常滑焼の影響により、12世紀後半に開窯。粘土紐の巻き上げ成形。自然釉がかかった壺の形式。桃山時代には鉄釉を施すようになる。中世における日本海側最大の規模で100基程の窯跡を確認。室町後期以降、半地上式の大型窯を造り、量産体制を確立。昭和22年に「六古窯」の最後に加えられた。 | 無釉 自然釉 | 茶褐色 暗緑色 濃緑色 鉄分の多い土 |
| 信楽 茶人に愛された窯 滋賀県甲賀市信楽町 | 常滑焼の影響下に、須恵器の系譜であるが、鎌倉時代に酸化焰焼成による焼締め陶に転じた。純白色に近い胎土を用い、高温による赤褐色の地肌が焼成される。緑色の自然釉がかかる。室町後期に茶人に注目され茶人の名を冠した茶道具を焼造。(紹鷗信楽、利休信楽など)江戸中期以降は、藁灰による白釉、銅呈色の緑釉、鉄呈色の黒褐釉が施釉され、日常雑器が焼かれた。 | 無釉 自然釉 | 赤褐色 緑色 鉄分の少ない土 |
| 丹波(立杭) 蛇窯(登り窯)による量産体制 兵庫県篠山市今田町地方 | 平安末期に常滑焼の系統として開窯。桃山時代に蛇窯(丹波特有の登り窯)が導入され、江戸初期には窯座制が開始。赤土部(あかどべ)釉が開発され、灰釉、黒釉と合わせて主に日用雑器が焼かれた。小堀遠州の指導により遠州丹波と呼ばれる茶器も焼かれた。18世紀頃には、「中丹波(ちゅうたんば)」と呼ばれる白地鉄絵、鉄泥を流しかける墨流し、白化粧法などの新装飾技法による焼成が行われた。 | 無釉 自然釉 | 濃緑色 耐火度の高い土 |

4. 用語解説と窯の分布

| | |
|-----------|--|
| 土師器 | 古墳時代(3世紀)から平安時代(11世紀)に至る長期かつ日本各地で使われた弥生土器の系統を引く素焼き土器。土師器という語は『日本書紀』雄略天皇17年条に「贅土師部(にえのはじべ)」、『延喜式』、『和名抄』では「波爾(はじ)」という記述が見られる。考古学用語としての「土師器」が定着する以前は、弥生土器と合わせ「埴瓮(はにべ)土器」と総称された。 |
| 瓦質(がしつ)土器 | 土師器の黒色土器の系統を引くもの。成形段階で器表面をヘラミガキして仕上げ、焼成の最終段階で焼物表面に炭素を吸着させ漆黒色に焼き上げる瓦質焼成の土器。瓦のような質感を持ち煤けたような特徴がある。色は灰白色又は灰黒色。畿内及び北九州地方に広がる。 |
| 陶質土器 | 有色土を 1000～1300℃の温度で焼き締め、釉を施さない焼物。焼成中の降灰により表面にガラス質の自然釉がかかったものもある。中国戦国時代から漢代の灰陶、朝鮮半島三国時代の土器、日本の須恵器がこれにあたる。古墳時代の考古学では、朝鮮半島で作られ、日本に舶来した還元焰焼成の焼物を陶質土器と呼び、国内の窯で焼成されたものを須恵器と呼び分け。 |
| 瓷器(しき) | 『日本後紀』、『延喜式』などに記載されている言葉で、施釉陶器を指す。瓷器には白と青瓷があり、前者は灰釉陶器、後者は緑釉や三彩などの彩釉陶器を指す。 古代において瓷器を最も大量に生産したのが猿投窯を中心とする尾張、美濃の窯業地で、この地域で生産された焼物を「瓷器系陶器」と分類している。 |

【須恵器系陶器窯の分布】

- ①瀬戸内海沿岸地域
= 古代の須恵器生産技術を踏襲
- ②北陸・東北地方の日本海側地域
- ③九州から琉球諸島地域

【瓷器系陶器窯の分布】

- ①東海地方
= 古代の灰釉陶器生産から継承
- ②東北地方の太平洋側地域



【参考文献】

- ・『中世考古くやきもの>ガイドブック 中世やきもの世界』 浅野晴樹著 新泉社 2020
- ・『日本 高麗 李朝 古陶見どころ勘どころ』 岡田宗叡著 光芸出版 1994
- ・『観る陶芸から作る喜びへ やきもの を始める人のために』 吉田新一著 池田書店 1999
- ・『別冊太陽 大壺小壺』 平凡社 1999
- ・『別冊太陽 六古窯を訪ねる』 平凡社 2019
- ・『中世須恵器の研究』 吉岡康暢著 吉川弘文館 1994
- ・『シリーズ「遺跡を学ぶ」泉北丘陵に広がる須恵器窯』 中村浩著 新泉社 2006
- ・『古墳時代須恵器の編年的研究』 中村浩著 柏書房 1993
- ・『研究入門 須恵器』 中村浩著 柏書房 1990
- ・『年代のものさし 陶邑の須恵器』 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006

【付録】



図の出典:『別冊太陽 六古窯を訪ねる』

<それぞれの見所どころ>

| 窯名 | 発色 | 器肌・文様 |
|----|--|---|
| 瀬戸 | <p>【灰釉】ビロード状の緑色から黄色まで様々な色合いを発色</p> <p>【鉄釉】鉄分の割合と焼成具合により飴釉から黒褐色を発色</p> <p>【黄釉】灰釉に含まれる微量の鉄分が酸化し黄色を発色</p> <p>【天然呉須】酸化コバルトを主成分として青色を発色</p> | <p>「印花」: 菊花文などの型を押付</p> <p>「櫛描文」: 櫛歯状の施文具で描画</p> <p>「貼花文」: 胎土と同じ粘土で貼付</p> <p>「画花」: 動植物文、幾何学文等</p> |
| 常滑 | <p>【自然釉】燃料の薪の灰が溶けて釉薬となり、淡緑色の自然な流れが景色を作る。</p> <p>【玉垂れ】自然釉や釉薬が器の下部に流れ玉のように溜まる</p> | <p>「玉垂れ」: 釉薬が玉のように溜り</p> <p>「猫描き」: 櫛目を利用した線状文様</p> <p>「押印」: 貝・骨・縄等を押型に使用</p> |
| 越前 | <p>【自然釉】耐火度が高く鉄分を多く含む粘土の使用により、器肌は茶色に焼き焦げ、暗緑色、濃緑色の自然釉がたっぷりとかかった重厚な景色</p> | <p>「胡麻」: 細かい斑点状の器肌</p> <p>「カセ」: 器面の灰が変質して剥落</p> <p>「刻文」: ヘラでフリーハンド描画</p> |
| 信楽 | <p>【自然釉】焼成条件により緑や茶色など微妙に変化</p> <p>【火色】焼成により鉄分が酸化し赤褐色に発色。最大の魅力</p> <p>【ビードロ】灰が長石粒と共に溶けて緑・黄褐色のガラス質化</p> <p>【ヌケ】炎が当たらず素地のまま白く焼け残る状態</p> | <p>「蟹の目」: 白いガラス状の粒</p> <p>「石ハゼ」: 素地収縮により珪石粒が表面に現れる。</p> <p>「檜垣文」: 肩部又は上胴部に施し</p> |
| 丹波 | <p>【自然釉】焼き締めにより光沢のある赤褐色を発色</p> <p>【窯変】焼成条件により予期しない器肌が出現</p> <p>【焦げ】オキに埋まった部分が炭化したようなぶつぶつの黒肌</p> <p>*「オキ」とは薪が燃えて炭ようになったもの</p> | <p>「火ぶくれ」: 胎土中の空気が膨張して瘤状に膨らむ。</p> <p>「葉文」: シダ、麻、ツタなどの葉を貼り付けて文様を付ける。</p> |
| 備前 | <p>【窯変】酸化焰焼成により灰色の素地が赤褐色「緋色」に変化</p> <p>【棧切り】器の表面に薪や炭が接触し、その部分が還元焼成状態となり窯変を起こす。これを「棧切り」という。</p> <p>【伏せ焼】焼物を重ねて焼くことで、上と下で異なる発色</p> | <p>「榎肌」: 降灰が少なく灰が溶けず渋く焼き上がった器肌</p> <p>「草花文」: 草花の文様を線刻</p> <p>「櫛目」: 須恵器の櫛目文様様式</p> |